

平成 31 年度（令和元年度）「年度末学校関係者評価」（外部評価）

	<p>項 目 (重点としたものに○)</p>	<p>学校の目標達成状況及び学校の取組の適切さ、改善方策について等の意見（外部評価者からの指摘を基に記載）</p>
<p>教育環境の 充実</p>	<p>① 学校安全の推進</p>	<p>① 児童の登下校時に交通指導員が付かなくなったが、地域の方、保護者ボランティア、PTA校外委員、旗振り当番の方等が率先して、児童の見守りを行ってくださった。今後も一層、逗子警察と協力し、交通安全教室等の指導の充実を図っていききたい。挨拶に関しては、評価委員から、低学年を中心に児童の方から進んで挨拶をしていくことが多くなったという感想をいただいた。</p> <p>② IPAD が導入され、どの学年においても積極的に活用している。特に授業の中で写真や動画を撮影したものをすぐにクラス全体で共有するような活用方法が多い。今後、無線 LAN の設置により、調べ学習等でのインターネットを活用した学習が進むと思われる。プログラミングの学習にも効果的に活用していきたい。</p> <p>③ 地域とは、「沼まつり」の伝承遊び、稲の学習や東逗子駅前のふれあい広場で催される七夕飾りなどで地域の方を講師に招き、児童と協働で活動を行っている。また、学校はどのような方針で教育を進めているのか、どのような特色のある活動を行っているのかなどを学校日よりやホームページで発信しているが、一方向になりやすいので、今後は全校行事の際にアンケートを取ったり、学校評価を地域に広げたりし、双方向の情報交流を進めてきたい。</p> <p>④ 児童（4～6年）のアンケート結果を見ると「友だちの話を聞き、自分の考えに生かしている」や「自分の意見や発表をみんながしっかりと聞いてくれる」の項目では90%以上の児童が「そう思う」あるいは「だいたいそう思う」と回答していた。しかし、「授業や学級会などでは、自分の意見を持ち、相手に伝わるように発表している」の項目では、「そう思う」と「だいたいそう思う」を合わせても70%台後半であった。友だちの意見や考えをしっかりと聞いたり、自分の意見を述べたりする力についてはきたようだが、自分の意見を相手に伝わるように表現を工夫して話すことにはまだ少しハードルが高いようだ。また、「進んで読書をしている」は全項目の中で「そう思う」あるいは「だいたいそう思う」と回答した児童が一番少なく、高学年の読書離れが一層顕著になってきたと思われる。だが一方で、評価委員からは、塾や習い事などで読書の時間がなかなかとれないのも一因ではないかという指摘もあった。ただ、低学年では、毎週朝の「絵本読み」の時間を楽しみにしている児童が多いことから、読書への興味・関心をどう維持し、中・高学年へと繋げていくか今後の課題としたい。保護者向けアンケートでは、昨年度「そう思う」の値が大きく下がった「授業参観・懇談会、学校日より等で学校の様子を発信している」の項目では、今年度は95%弱の保護者が「そう思う」「だいたいそう思う」と回答していた。学校からの情報はできる</p>
	<p>②教育情報化の推進</p>	
	<p>③地域との協働推進</p>	
	<p>④学校評価を生かした学校づくり</p>	

		<p>だけ早く、こまめに伝えることはもちろん、学年・学級懇談会や面談では家庭と学校との双方向での情報交流が活発に行えるよう、引き続き努めていきたい。そして、家庭や地域に開かれた学校づくりの推進を一層進めていく。</p>
I 学習指導の 充実	① 授業改善の推進	<p>① 委託研究 I の取り組みにおいて、2名の研究講師から「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善について、指導いただいた。また、それを基盤として、体育科における深い学びのある授業づくりについて、各ブロックで論議を深めることができた。さらに、体育の授業だけにとどまらず、研究授業や初参観の授業に多くの教員が参観する雰囲気生まれた。</p> <p>② 学校アンケートの結果から、本校の多くの児童が日常から規則正しい生活ができていないため、担任はもとより、養護教諭、栄養士、また他校の栄養教諭を招き規則正しい生活の指導と「早寝早起き朝ご飯」の児童への指導と定着を図った結果、一定の改善が見られた。また、今年度は県の「体力向上サポーター」を派遣していただき、新体力テストがある5年生を中心に健康体力づくりの増進を図った。児童の事後アンケート結果から体育の授業が好きになったと答えた児童が増えた。</p> <p>③ 校内外において地域の方や各専門機関と連携しながら、体験型学習、例えば福祉学習や芸術鑑賞、まち探検、宿泊学習でのものづくり体験等の機会を多く取り入れた。特に本校は地域性から自治会の方にボランティアに来ていただき、田植えから稲刈りまでの田んぼの学習、沼小まつりでは昔の伝承遊びなどを教えていただき、子どもたちの地域への関心を高めている。</p> <p>④ 普段の授業から、教科・領域を問わず主体的で対話的な学習活動を多く取り入れることで、児童の探究心を養い、自ら課題を発見し、解決しようとする能力を培わせた。今年度の児童（4～6年）の学校評価アンケートの結果を見てみると「友だちの話を聞き、自分の考えに生かしている」や「自分の意見や発表をみんながしっかりと聞いてくれる」の項目では90%以上の児童が「そう思う」あるいは「だいたいそう思う」と回答した。また、「授業や学級会などでは、自分の意見を持ち、相手に伝わるように発表している」の項目では、70%が「そう思う」と「だいたいそう思う」と回答した。友だちの意見や考えをしっかりと聞いたり、自分の意見を述べたりする力がついてきたようだ。また、いじめ等個々の課題を全体で扱うことで児童が自分事として捉えられるように道徳教育の充実を図った。いじめの総数は減少傾向にあるが、顕在化していないケースもあるので、引き続き注意深く見ていきたい。</p>
	②健康体力づくりの推進	
	③体験活動の充実	
	④今日的課題への取組	
II 支援の充実	① 支援環境の充実	<p>① 「たんぼぼ級」の子どもたちがごく自然に交流級で学んでいる姿が良い。また、「たんぼぼ級」の個別の学習では、「個に応じた指導・支援」をきめ細やかに行っているという感想が複数の委員から聞かれた。しかし、せっかく個に応じた指導を行っても、それが、子どものどのような面を育てることを目的に行い、そしてその児童にとってどの程度効果が上がったのか</p>
	②安心できる居場所づくりと絆づくりの推進	

	③問題行動対策・不登校対策の推進	を、具体的に、保護者に伝えていく必要がある。
	④幼・保・小及び小・中の連携推進	<p>② 登校が困難な児童やクラスに馴染めない児童に、教育相談コーディネーターやスクールカウンセラー等による個別の指導・支援を支援教室や保健室等別室を利用して適宜行い、教室復帰に向けた適応指導を実施した。また、普段から道徳や特別活動、学校行事（運動会や宿泊行事、学年長縄大会等）で仲間づくりを意識した取り組みを積極的に行った。長縄大会の練習風景を参観をした委員からは「子どもたちがアドバイスし合いながら協力して取り組む姿が良かった」という意見を多くいただいた。</p> <p>③ 特に不登校が疑われる連続3日以上欠席者については、教育相談コーディネーターに報告を挙げるとともに、担任から保護者への電話連絡や家庭訪問を通してきめ細やかに対応するようにした。また、職員会議後の児童指導支援部での情報共有では、各学年の課題をもつ児童の現況や今後の対応等について全職員で共有した。さらに、年に2回実施している「生活アンケート」の結果を分析し、評価委員の意見を踏まえつつ、校内で共有することで未然防止に役立てるように努めた。</p> <p>④ 幼保小との連携では、スタートプログラムを活用し、幼保からのスムーズな学習をスタートできるよう教材や指導方法を工夫した。1・2年生の「あきまつり」や1年生の「ようこそ集会」では幼保の園児を学校に招き、低学年児童と積極的に関わり合う機会を設け、1年生に上がることへの不安を軽減できるようにした。また、小・中との連携では、一小一中の地域性を生かし小中で教員同士の合同研修の機会を設けたり、外国語や体育等の9ヶ年を見据えたカリキュラムの構築を図ったりするようにした。今年度は、研究発表会もあったが、それ以外にも中学校の教員が、授業参観に来る機会が増えたことで一層の小中の連携が進んだ。</p>
III 学校組織の 充実	①学校・学年・学級 経営の充実	① 年度当初に示された学校経営案をもとに、児童の発達段階や特性を鑑みて学年・学級目標を立ててもらった。また、お便りやホームページ等で広く保護者や地域の方へ発信し、学校関係者評価委員会や地域教育協議会で広く周知し理解を図るとともに、合わせてご意見をいただいた。年度末の評価委員会では、「おおむね教育目標が達成できた」という意見をいただいたが、合わせて「いじめ対応」などの課題もあった。今後は、いただいた意見を PDCA サイクルに基づき検証や再考を行い、次年度へ生かしていく。
	②研究・研修の充実	
	③信頼に基づいた指 導の推進	
	④働き方改革の推進	② 2018、2019 年度は逗子市教育委員会より委託研 I を受けたため、専門の講師の指導を仰ぎながら、校内研究を進め、校内外にその成果を発表した。評価委員からも充実した研究ができたとの一定の評価を得た。ただこれで終わりではなく、年々変化する児童の実態や特性に合わせ、研究の成果を弾力的に生かしていくことが大切であるとの意見もいただいた。2020 年度以降は、さらなる研究の深化を目指すとともに、「特別活動」の領域に新たに視点を当て、実践を通して研究を続ける。また、次年度についても新学習指導要領の実施に伴い、OJT をはじめ、市内外の研修に参加し研鑽を図る。

		<p>③ 今年度は、体罰・不適切な指導の定義を再確認し、深い児童理解と児童との信頼関係に基づいた適切な指導を目指すよう努めた。保護者からのアンケート結果では教員の体罰や不適切な言葉かけなど厳しい意見も見受けられたが、全職員が自分事として受け止められるよう再度綱紀粛正を図った。また、課題を一人の教員が抱え込むことなく、チームとして対応することを徹底した。</p> <p>④ 今年度はできるだけ勤務時間内に業務を終えるように努めるようにしたが実現は出来なかった。保護者対応や事務的な業務に多大な時間がとられてしまうため、急速な改善は困難だが、日常業務の洗い出しや精選を行い、出来ることを一つ一つ積み上げていくことで働き方改革を進めていきたい。</p>
--	--	--